

令和3年 12月1日	農作物病虫害発生予報 12月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	---------------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	6
III	参考(予報の見方、気象予報)	7

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	やや少	やや少	少
	うどんこ病	平年並	平年並	多
	アブラムシ類	やや多	やや多	多
	ハダニ類	やや少	やや少	少

お問い合わせ先

TEL (083) 927-4006

FAX (083) 927-0214

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年5.3%)、発病株率0%(平年0.1%)、発病果率0%(平年0.0%)で平年に比べやや少なかった(一)。

イ 気象予報では、気温は低く、降水量はほぼ平年並(一)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 하우스内が多湿にならないように、晴天時にはできるだけ換気を行う。

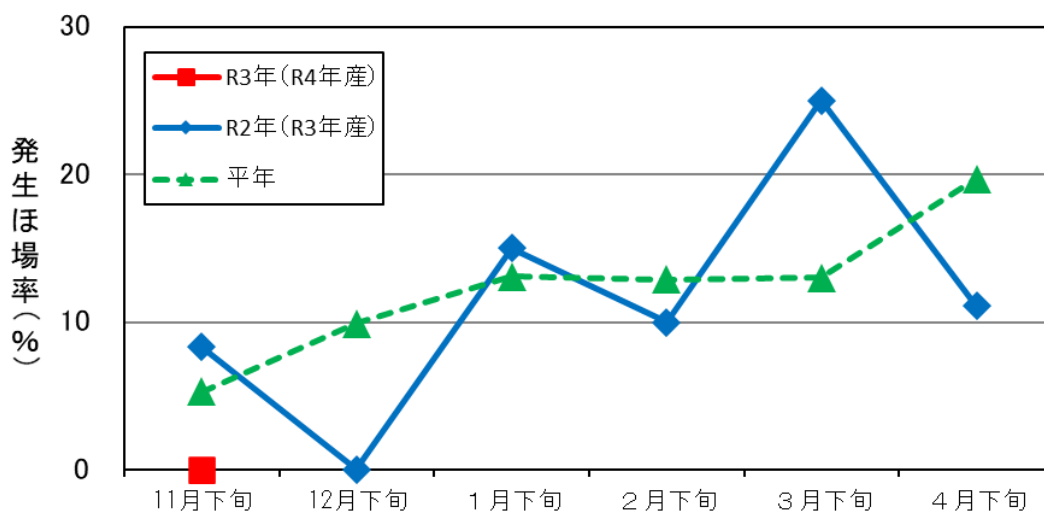
イ 被害果等の発病部位は伝染源となるので、早期に取り除く。また、取り除いた被害果は、ビニール袋に密閉して施設外に持ち出し、適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

ア ポリオキシシン剤、ジカルボキシイミド系薬剤(スミレックス剤、ロブラール剤)、アゾキシストロビン剤(アミスター剤)は耐性菌が出現しているため、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴ灰色かび病の発生推移

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	発病前、発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率25.0% (平年22.5%)、発病株率6.3% (平年4.4%)、発病葉率2.4% (平年1.6%)、発病果率0.5% (平年0.3%)で平年並みであった (±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害茎葉、被害果は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

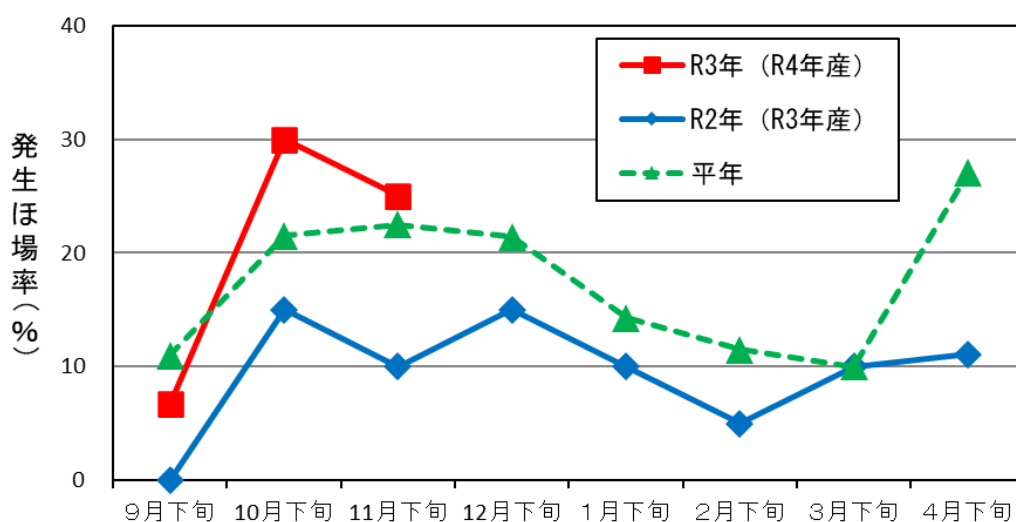
ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう古葉を除去し、丁寧に散布する。

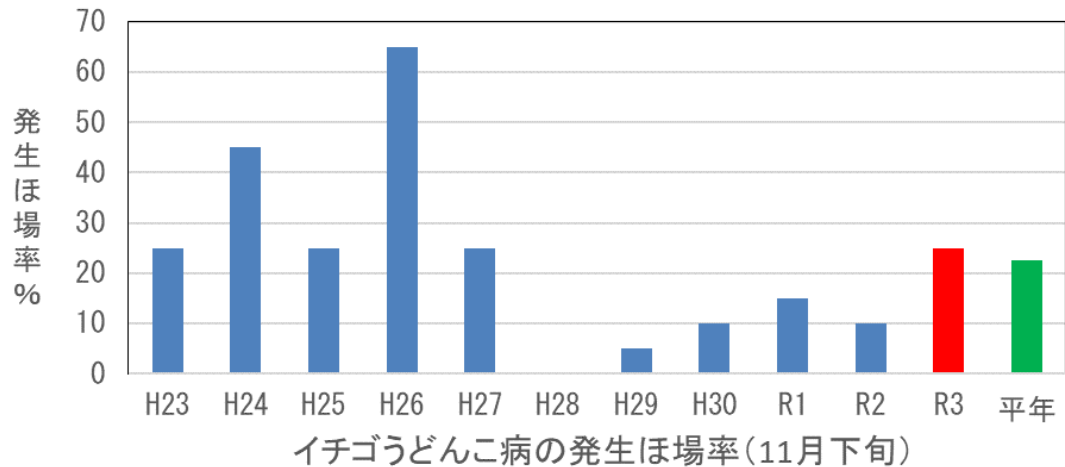
ウ トリフミン剤などのステロール生合成阻害剤は、耐性菌が出現しているため、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1回～2回薬剤を散布する。

オ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

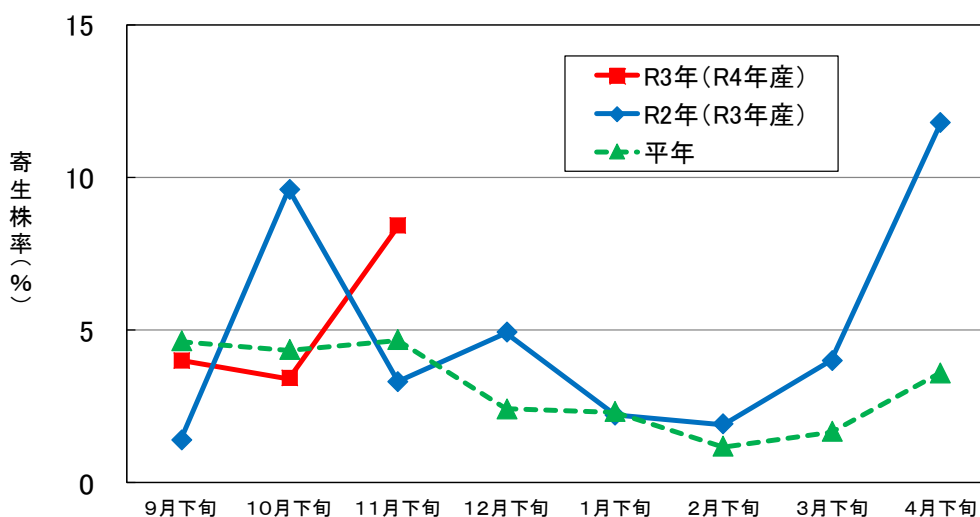
- ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率25.0%(平年27.9%)、寄生株率8.4%(平年4.7%)で平年に比べやや多かった(+)。
- イ 一部、多発しているほ場がみられた(+)。
- ウ 気象予報では、気温は低い(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。
- イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。
(山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/3/e/3/3e30ea51da8efd56b606d192ed6b0f26.pdf>)



イチゴ アブラムシ類の発生推移

4 ハダニ類

令和3年10月6日付け令和3年度農作物病害虫発生予察注意報第2号参照

https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a17201/nougyou/shigen/tyuuihou_keihou.html

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.0% (平年32.0%)、寄生株率3.8% (平年8.8%)で平年に比べやや少なかった (一)。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さく、優占種であるナミハダニは体色が薄緑色で確認しにくいいため、ルーペを使用して葉裏を確認する必要がある。

イ 摘除した下葉10枚程度を白い紙袋に入れ、室内に1日おくと翌日にはハダニは新鮮な葉を求めて移動し、紙袋の上部に集まるため容易に観察できる。

ウ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵（ミヤコカブリダニ）は次のことに注意して使用する。

（ア）ハダニの発生前、または天敵に影響の少ない薬剤でハダニ類の密度を低下させた後、放飼する。

（イ）天敵を放飼した後は、天敵に影響の少ない薬剤（マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等）を使用する。

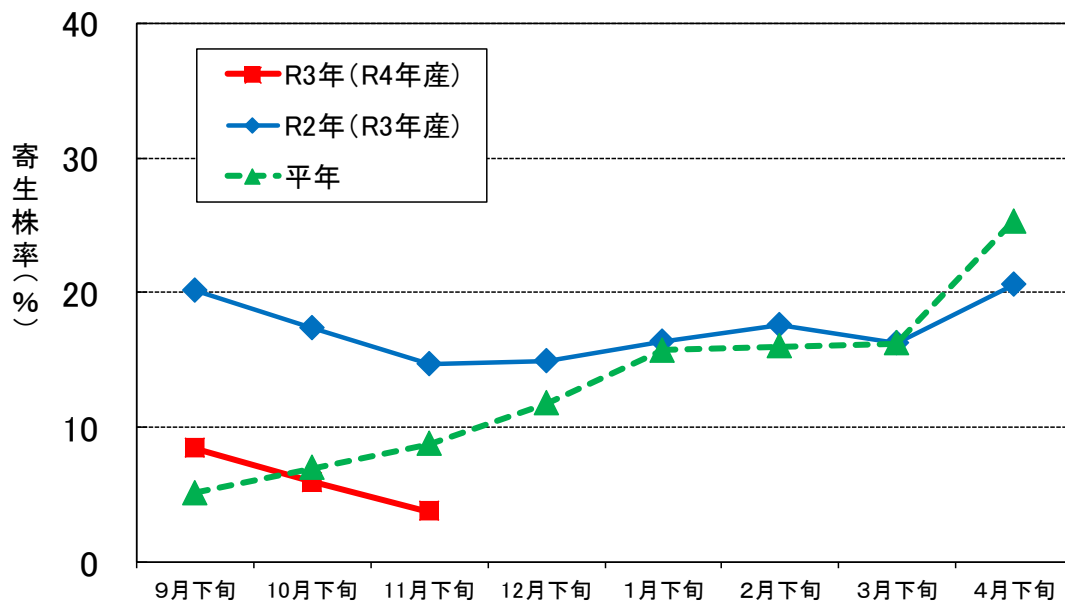
（ウ）硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 開花期以降の薬剤散布は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

（山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照）

（ <https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/3/e/3/3e30ea51da8efd56b606d192ed6b0f26.pdf> ）



イチゴ ハダニ類の発生推移

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	コナジラミ類	平年並	平年並	多	20.0	25.9	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（11月25日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少ない	平年並 (%)	高 い (%) 多い
気 温	5 0	3 0	2 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日照時間	4 0	4 0	2 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	5 0	3 0	2 0
2 週 目	5 0	4 0	1 0
3～4週目	4 0	3 0	3 0